

弁護士として働くということ

会員 船井 克矢

1 はじめに

私が弁護士として働くようになって約1年が経った。この1年を振り返りつつ、「弁護士として働くということ」を考えてみたいと思う。

2 勤務状況

現在、私は勤務弁護士、いわゆるイン弁である。事務所事件については、先輩弁護士の指導を受けながら一緒に事件処理をしている。事務所事件とは別に、国選の刑事事件や一般民事事件を個人事件としてやっている。

3 弁護士の仕事の魅力

- (1) 私が修習生になった頃に作成した履歴書には、「私は、①自分の頭一つで仕事ができること、②人と接し、人の役に立つことが実感できること、という二点に魅力を感じ、弁護士を志望しました」と記載されていた。
- (2) 弁護士を経験してみると、やはり当時考えていたとおり、ありきたりではあるが、悩み事を抱えて相談にやってきた依頼者の表情が、少しでも明るくなって帰って行く姿を見ると、何ともいえない満足感がある。そして、満足して頂いた依頼者が、また他の依頼者を連れてきて下さる様子を見て、人とのつながりは大事だと改めて感じる。

- (3) 一方で、私は、個人事件を経験して、当時は想像していなかった弁護士のやりがいを感じている。

それは、仕事の成果が報酬として直接反映されることである。

私が学生時代に経験したアルバイトでは、結局、自分はお寿司屋さんや塾の歯車でしかないのではないかと、自分がしている仕事（お寿司屋さんの皿洗いや学習塾のテキスト作り等）が、お客さんや生徒が支払う金銭と直接結びついていないのではないかと、という違和感を常に感じていた。

私は、仕事の成果が報酬として直接反映されるということも、弁護士という仕事の魅力だと思う。

4 弁護士の仕事の難しさ

弁護士だからこそその魅力がある一方で、弁護士だからこそその難しさもある。

先輩弁護士が私に対して常に繰り返す言葉が、「弁護士としての責任感を持って仕事をするように」という言葉である。

この言葉は、言うことは簡単ではあるが、なかなか実行が難しい。それどころか、正直に言うと、つい最近まで、言葉の意味をよく理解できていなかった。

自分の仕事によって、依頼者の人生を大きく左右してしまいかねないにもかかわらず、イン弁という立場で先輩弁護士と一緒に業務をしていると、その事件処理に対する最終責任者でないという深層心理が働くのか、あるいは、先輩弁護士に遠慮してか、徹底的に自分の主張の根拠となる文献や判例を探したり、依頼者に対する事実関係の聞き取りが、甘くなってしまっていたように感じる。

タイムスケジュールも含め、自分が主体的に事件を処理していくという意識を持って仕事をしなければならないと、自分自身の中で意識改革をしているところである。

5 おわりに

先日、ボス弁が、エクスターンシップで来ていたロースクール生に対して、「ADRは、何の略か分かるか」と聞いていた。内心、私が聞かれなくてよかったと思っていたのだが、そのロースクール生が答えられずにいると、ボス弁は、「弁護士という仕事は、知的好奇心で動いているようなものだ。分からないことがあれば、なんでも勉強しなさい」と述べた。

なるほど、弁護士という仕事は、世の中の全ての事象に係わることができる仕事である。自分の知らない世界を知ることができること、自分の知的好奇心を満たすことができることも、弁護士の仕事の魅力なのかもしれない。実際、私はボス弁が御年77歳にして、自室でイタリア語を勉強している姿を目撃したことがある（仕事のためではなく旅行のためかもしれない）。

弁護士だからこそ難しいこと、つらいことが、これから沢山でてくると思う。

ただ、私は、弁護士だからこそ感じられるやりがい、魅力は、もっと沢山でてくるのではないかと、楽しみにしている。